琉球大学学術リポジトリ

難易レベルを重視した家庭科衣生活領域のカリキュラムの検討　―被服材料・被服整理分野を中心として―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
	公開日: 2008-11-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 福田, 典子, Fukuda, Noriko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8167

難易レベルを重視した家庭科衣生活領域のカリキュラムの検討
――被服材料・被服整理分野を中心として――

福　田　典　子*

(1997年9月30日受理)

本研究では，家庭科衣生活領域の指導内容のうち，被服材料・被服整理を中心として，小・中・高の一貫性を考えた体系的な指導を目的として，指導内容の配列を検討した。まず，衣生活領域の最も重要な指導内容として，「衣服の着方」「衣服の購入」「衣服の手入れ」を挙げ，それぞれを幾つかの指導内容に分類した。次に，小学校5学年家庭科から高等学校被服までを6段階に分類し，それぞれの発達段階において，履修がふさわしい内容を配列した。中学校1学年家庭生活を履修し終えるまでに，衣生活に関する基礎的事項についての知識や技能を，中学2学年以上では応用的な事項についての知識や技能を身につける必要があると考えられる。

1　はじめに

児童，生徒を取り巻く衣服素材，衣生活環境の変化は早いばかりでなく，近年，それらの一層の多様化，複雑化が指摘されており，家庭科衣生活領域の重要性が増大している。他方で，これらの多様化，複雑化は衣生活のカリキュラム作成をますます困難にしている。このような状況において，あらためて指導内容の基礎・基本に注目しなければならない。これまでに，21世紀をめざした家庭科カリキュラムに関する報告[1)2)]は幾つか出されているが，それらは家庭科の特定領域ではなく，全領域を対象に，家庭科教育の立場から検討されたものが多い。さらに，現行のカリキュラムにおいても，これまで出されたカリキュラム案における小学校・中学校・高等学校の取り扱いを分析すると，扱われている指導内容の項目自体はほぼ同様[3)]であり，対象を個人から家族へ，家族から社会へと学習者の視点の拡大を意図したものが多く，扱い方が小学生向き，中学生向き，高校生向きに配慮されている。また，内容の表現が平易なものから，専門的な用語によるものへと配慮されている。すなわち，これまでの小中高カリキュラムにおいては，指導内容の難易性からの配列の視点は少なく，類似の内容を繰り返し深めるように配列されているように思われる。今後は指導の原点に立ち返り，内容項目を学習者の発達段階に応じて，理解や習熟の容易なものから，難易なものへと，重要性の高い基礎・基本的内容から，応用・発展的な内容へと段階的に整理し配列する必要があるように思われる。

ところで，被服学の立場からは，様々な調査結果をもとに衣生活教育への提言をまとめた報告もいくつかみられるが，これらの中で，小中高の一貫性を意識した報告[4)5)]は少なく，多くは指導内容の提案[6)7)8)9)10)]となっている。

そこで本研究では，衣生活領域のうち，被服材料，被服整理に関連の深いと思われる指導内容を中心とした普遍的な事項を取り上げ，これらを難易レベルと重要度に応じて小中高の一貫

*琉球大学教育学部　家政学科

性を意識して整理分類することを試みた。

2　指導内容の精選

表1に，現行家庭科の指導書・学習指導要領解説における被服材料および被服整理の取り扱いをまとめた。小学校においても，中学校においてもほぼ同様の内容を繰り返し指導するようになっており，小中高一貫した内容の関連性がわかりにくいが，内容をまとめると，被服の適切な着方と手入れに関する事項，製作および購入時に必要な基礎的な被服材料の事項が中心となっている。

表1　現行家庭科の指導書・学習指導要領解説における被服材料および被服整理の取り扱い

段階	名称など		指　導　内　容
小学校	家庭科	第5学年	(1) 目的に応じた着方の工夫 (2) 日常着の整理・整頓やボタンつけ
		第6学年	(1) 適切な日常着の選び方と整え方（組成表示，取り扱い絵表示，寸法表示） (2) 日常着の手入れの仕方 ・洗濯（手洗い中心） ・ほころび直し
中学校	技術・家庭	家庭生活	家族の仕事 ウ．適切な着用及び手入れ ・被服計画 ・着用の工夫 ・被服材料に応じた手入れ（洗濯，しみぬき，補修）
		被　服	簡単な被服の製作 イ．製作に適した被服材料の選択 ・日常着に適した布地の特徴（組成繊維の種類及び組織とその特徴）（天然繊維と化学繊維の特徴：綿，毛，レーヨン，ポリエステル） ・製作に必要な縫製用糸や付属材料の選択 ・日常着に適した布地の性質（防しわ性，丈夫さ，アイロンかけの効果） ・品質表示
高等学校	家庭一般		衣生活の設計と被服製作 イ．被服材料と被服管理 (ア) 被服材料の性能と選択…繊維および繊維製品の種類と性能 (イ) 被服計画 (ウ) 被服整理…被服材料に応じた洗濯，仕上げ，保管　等
	生活技術		衣食住の生活管理と技術 ア．衣生活 (ア) 被服管理…被服の機能や被服材料の理解，被服計画，被服の選択，被服材料に応じた被服整理
	生活一般		家族の健康管理 ア．衣生活 (ア) 家族の健康と被服…保健衛生面を中心とした被服材料や着装 (イ) 被服整理…日常の取扱いや手入れ
	被　服		被服材料　ア　被服材料の種類（種類と特徴，新素材） イ　被服材料の性能（性能，風合い） 被服管理　ア　被服計画 イ　被服整理（洗濯，漂白，増白，加工，仕上げ，しみ抜き，保管）

図1～3に小中高で学ぶべき衣生活領域の内容項目についての調査結果を示した。これは家政学と家庭科教育に対する社会的要請として1987年に出された報告書[1]より作成したものである。全国の大学の衣生活領域担当教官146名と小中高家庭科教師647名を対象に行ったもの

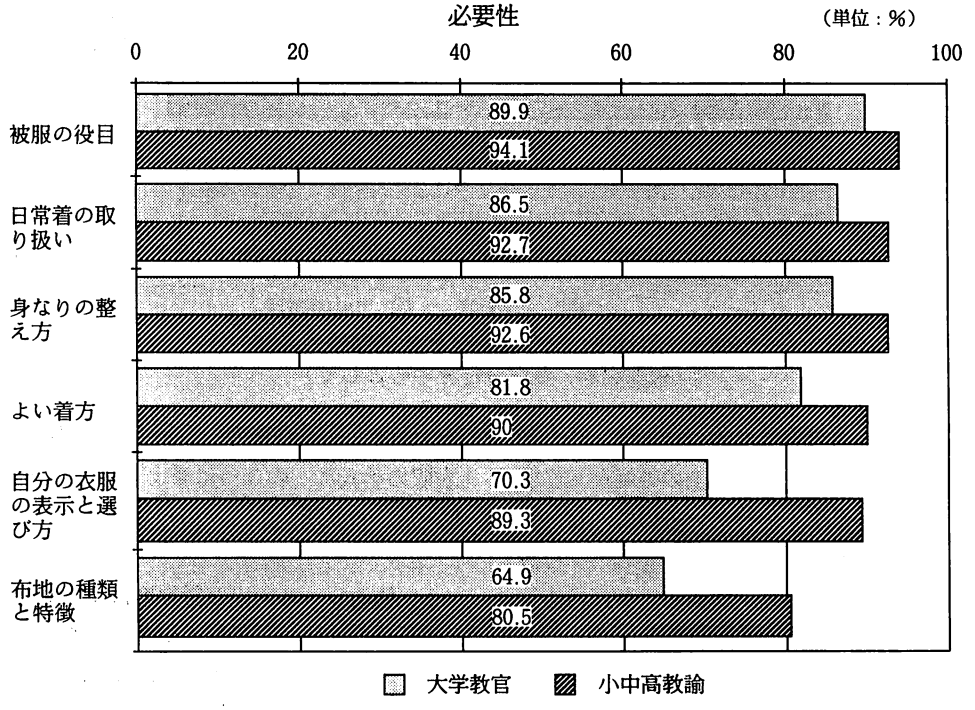

図1　小学校で学ぶべき衣生活領域の内容
（被服材料，整理分野を中心として）

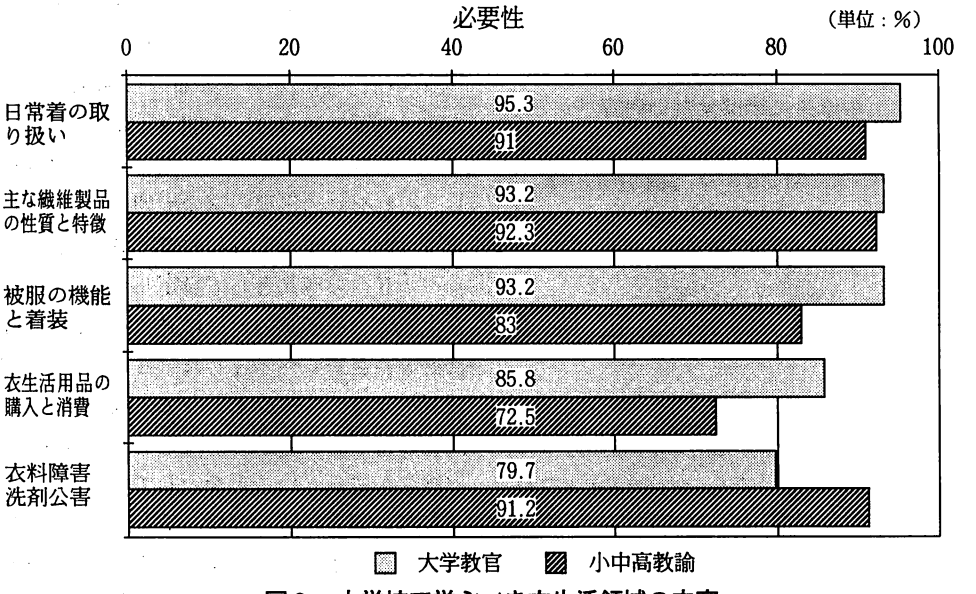

図2　中学校で学ぶべき衣生活領域の内容
（被服材料，整理分野を中心として）

（図1～3　日本家政学会編「家政学と家庭科教育に対する社会的要請、中間報告書」を基に一部修正して作成）

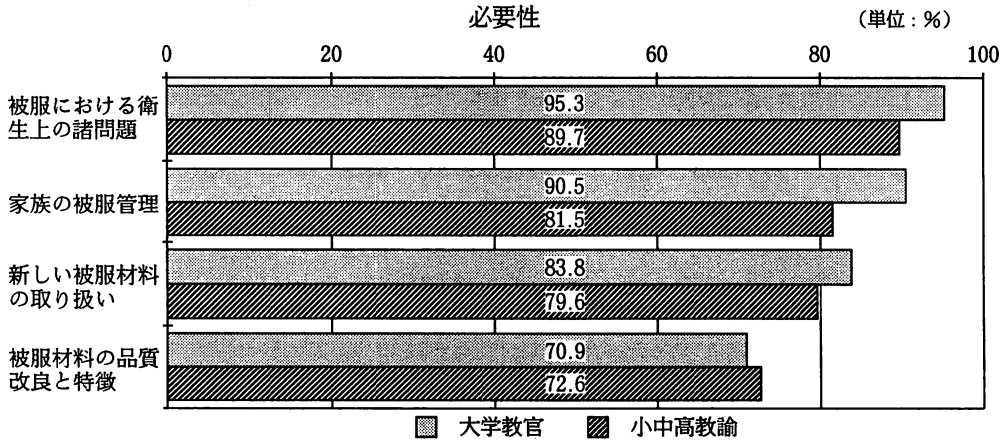

図3　高等学校で学ぶべき衣生活領域の内容
（被服材料，整理分野を中心として）

で，近年では最も大規模な調査結果であると思われる。この中から，60%以上の教師から必要と回答された項目をまとめているので，これらの項目は大いに参考にできる。いずれの学校段階においても被服の機能，被服の着方，被服材料の理解，被服の選択，被服の管理が中心となっている。表2に家庭科教育の新構想研究委員会から1995年に出された資料[2]から小中大の教諭・教官の70%以上が学ばせたいと考える項目および中学校の教諭の10%以上が学ばせたいと考える項目をまとめて示した。ここでも被服の着方，

表2　中学生に学ばせたい内容

被服の役割と着方	被服の機能，個性を表現する着装
被服材料	布（糸）のなりたち，繊維の種類と特徴
衣生活の管理	・衣服計画と選択・購入 ・品質・取り扱い表示と洗濯 ・衣服の手入れと保管

家庭科教育学会「家庭科教育の新構想研究委員会」1995年資料より作成

被服材料の理解，被服の選択，被服の管理が中心となっている。堀内らが成人に対して行った意識調査の結果[8]においても，小学校段階において習得させたい項目として着方，手入れの仕方，縫い方，選び方および購入の仕方の4つに大別されると報告されている。

以上の結果から，その共通の指導項目を抽出すれば衣生活の材料・整理を中心とした指導内容の柱は「衣服の着方」，「衣服の購入」，「衣服の手入れ」の3つにまとめることができる。

3　難易レベルおよび重要度による分類

先の3つの柱に含まれる指導項目を挙げ，それぞれの難易レベルを検討し，表3にまとめた。さらに，小中高の一貫性を重視し，必修や選択を考慮しながら，6つのレベルに区分した。すなわち，小学校では第5学年家庭科をレベルⅠ，第6学年家庭科をレベルⅡとし，中学校では，「家庭生活」領域をレベルⅢ，「被服」をレベルⅣ，高等学校では，今回は「家庭一般」に限定し，これをレベルⅤ，「被服」をレベルⅥとし，それぞれの指導内容の配列についての検討を行った。レベルⅠは初めて学ぶ家庭科なので，レベルⅡへの導入として設定した。レベルⅡは衣生活での最低限の自立に必要な知識や技術の習得をめざすレベルとした。さらに，レベルⅢはレベルⅡの完成段階として，基礎的・基本的内容の習熟をめざすレベルとした。表中の○印は履修が望ましいことを示している。

衣服の着方に関しては，涼しい着方への配慮は5，6年生の半数しかできていないという鮒田の実態報告[6]があるので，暖かい着方と合わせてレベルⅢかレベルⅣまでには身につけたい項目である。

表3　難易レベルによる衣生活領域の指導内容の分類案（被服材料・整理分野を中心として）

段階		小学校		中学校		高等学校	
		家庭科 5学年	家庭科 6学年	家庭生活 (35時間必修)	被服 (20〜30時間)	家庭一般 (4単位必修)	被服
		義務教育					
		必修					
指導内容		レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ	レベルⅣ	レベルⅤ	レベルⅥ
衣服の着方	暖かい着方	○	○	○			
	涼しい着方		○	○	○		
	動きやすい着方		○	○	○		
	安全な着方			○	○	○	
	調和のとれた着方				○	○	○
	行事にふさわしい着方					○	○
	個性的な着方					○	○
衣服の購入	身体寸法	○	○	○			
	サイズ表示		○	○			
	布地の一般的な性質			○	○	○	○
	繊維の種類と性質			○	○	○	○
	組成表示と性能表示			○	○	○	
	新素材や加工					○	○
	総合的な品質評価					○	○
衣服の手入れ	しみの応急処置	○	○	○			
	家庭洗濯		○	○	○		
	ドライクリーニング			○	○		
	ボタンつけ	○	○	○			
	ほころびなおし		○	○			
	裾まつり，裾かがり			○	○		
	保管			○	○	○	

衣服の購入に関しては，身体寸法を正しく把握し，サイズ表示を理解することが最も，基礎的・基本的な項目である。全国の小学6年生を対象に家庭科での学習項目の実践度を調査した内野らの結果[9]によると，「衣服の大きさやサイズ表示」が最も高い実践度（利用度）を示すことから，必要性，実践度の大きさのいずれの点からも重要であることがわかる。さらに衣服に関する失敗例を，小学生から大学生までを対象に調査した岡村らの結果[4]によるとサイズの重要性を認識しているにもかかわらず，「サイズ違い」が最も多いことから，身体寸法を正し

く把握し，サイズ表示を理解していない消費者が多いことがうかがえる。

衣服の手入れに関しては，日常的な項目が基礎的・基本的な項目といえる。さらに，わずかな処置で衣服の寿命を著しく短くすることをまぬがれることは最も重要な項目である。このような観点からすると，家庭洗濯よりも，しみぬきの応急処置と基本型のボタンつけが最も基礎的・基本的な項目と考えられる。全自動洗濯機やコンパクト洗剤の普及に伴い，家庭内の洗濯物の約半分を占める綿製品の洗濯はほとんど自動化され，一見，手軽に行えるようになった。取り扱いラベルに示される水温に関しても，日本では常温が主流であり，洗濯機で温度選択はしにくいため，それほど実際の洗濯には生かしにくい。一方，しみは早期に応急処置をしなければ，大変除去しにくい。さらにボタンも早期に着用者が対応しなければ，紛失しやすい。しみが付着したり，ボタンが取れた衣服は，サイズや柄がどれだけ合っていても，着用しにくい衣服となってしまう。

鮒田らの調査結果[6]によると，自分で衣服を選択することが小学校5，6年生で急増し，その自立度が高い児童ほど，ほころび直しの実践度が高いと報告されている。さらに岡村らの調査結果[4]によると，自分で衣服を購入する生徒が半数を越えるのは，中学校2年生であると報告されている。

これらのことから，①主体的な選択能力と主体的な手入れ能力は密接にかかわり，衣生活の運営能力として両者が相互作用しながら，より良い衣生活の自立，向上につながること，②衣生活の設計運営能力を形成する発達段階として，小学校5年生から中学校2年生が極めて重要な段階であることが分かる。したがって，中学校1～2年生までに，衣服の着方，衣服の選択（購入），衣服の手入れに関する基礎・基本的な知識や技術を有機的に習得させる必要があると考える。

ところで，近年，繊維製品の素材の開発や加工技術の進歩によって，多種多様の素材の知識がなければ，適切な手入れが行いにくくなっており，手入れの方法も複雑化してきている。したがって，中学校1～2年以上では，より応用・発展的な被服材料の性質や取り扱いについての内容を取り扱う必要があるといえる。

4　学習を通して育成したい力

表4は日本教育大学協会全国家庭科部門小・中・高のカリキュラムに関する特別委員会作成の資料[11]において，出された目標観点（育てたい力）のうち衣生活の部分を一部修正して作成した表である。衣生活の指導を通して育成したい力には幾つか挙げられるが，特に3つの力が強調されている。表4にあるように，最も重要な基本的な力としては，衣生活において「快適性を追求する力」といえる。さらに衣生活に関する「基本的生活習慣を形成させようとする力」が個の自立につながる重要な力といえる。これらの内容をレベルⅢまでに習得させた方が望ましい。さらに衣生活の「科学的な原理原則を理解しようとする力」は，やや応用的な力であるのでレベルⅤまでに育てたい力といえる。

5　まとめ

衣生活領域のうち，被服材料，被服整理に関連の深いと思われる指導内容を中心として，これらを難易レベルと重要度に応じて整理分類し，カリキュラムの方向性についての提案をおこなった。本研究では被服構成，衣生活文化などの指導内容には触れることができなかったが，衣生活の指導内容はこれらの内容とも深くかかわりあっている。その意味においては，被服構成などを含めてのトータルな提案が必要であるが，その最初の段階として，被服材料，被服整理に絞った整理が必要である。

今後，個性的で豊かな着装の能力が求められるとともに，環境や安全への視点も必要になり，内容の精選にも限界があり，現行家庭科の時間数では到底指導不足になることが予想される。中学校の「被服」領域を「食物」領域と同様に選択ではなく，男女の必修領域として学ばせる

表4　中学校・高等学校において指導を欠かせない項目と育てたい力

段階		中学校						高等学校			
領域など		家庭生活	被服					衣生活			
項目など / 育てたい力		衣生活	被服のはたらき	私たちと被服	着方の工夫	被服の購入	これからの衣生活	被服の機能	被服材料	被服の選択	被服管理
生活者としての個の確立	自己尊重		△	△				△	△	◎	△
	基本的生活習慣の形成	○									◎
	判断力	△	△	△			△				
	意志決定力				△		△				
	実行力	○			△	△	○	◎		◎	○
	家庭生活への関心										○
	家族への理解							△	△		△
生活の科学性	生活の原理原則理解							◎	◎	○	◎
	分析的思考	△		△	○	△	△	○	○	△	○
	健康・安全への配慮	○							○	△	○
	生活技術・技能の獲得	○		△	○	△	△			○	○
	数的処理									△	
	情報獲得				△	△				△	
生活に対する感性	快適性を追求する力	◎	○	◎			○	○	○	◎	◎
	生活の美・芸術性	△		△				△		○	
	他者への思いやり愛情				△					△	
生活の設計	マネージメント力	△			△	○	△	○		◎	◎
	予測力				△	△		△		○	○
	構想力						△				
生活者としての社会性	相互理解							○	○	○	○
	社会の一員としての素養		△					△		○	
生活の創造	伝統文化の理解							○			
	生活様式の創造							△		△	△
	環境醸成								○		○

◎非常に重視，○重視，△必要

日本教育大学協会全国家庭科部門小・中・高のカリキュラムに関する特別委員会（京都教育大学加地芳子グループ）作成資料を基に一部修正して作成

ことを切望する。そうなれば，本研究で示した衣生活での最低限の自立に必要な知識や技術の習得の完成をめざすレベルがレベルⅢからレベルⅣにゆとりをもって設定できる。

参考および引用文献

①日本家政学会編：家政学と家庭科教育に対する社会的要請，中間報告書（1987年）

②家庭科教育学会編：家庭科教育の新構想研究委員会資料，（1995年）

③貴田康乃：小中高の発達段階と家庭科，家庭科教育，第63巻，p. 66（1989年）

④岡村美乃里，諸岡晴美，中川眸：小・中・高等学校における体系的な衣生活教育のあり方に関する研究（１）－衣服購入および衣服整理についての調査から－，日本家庭科教育学会誌，Vol. 40，No. 1，p. 39（1997年）

⑤井上真理：被服・衣生活分野の基礎・基本とその発展，家政学研究，Vol. 43，No. 1，p. 11（1996年）

⑥鮒田崎子：愛媛県における小学生の被服の着用に関する意識と行動（第一報）－日常着の着方について－，日本家庭科教育学会誌，Vol. 36，No. 3，p. 27（1990年）

⑦福澤素子,狩野美和，森永恵美：小学校課程における消費者教育衣領域カリキュラムの検討，日本家庭科教育学会誌，Vol. 30，No. 3，p. 22（1987年）

⑧堀内かおる，武井洋子，田部井恵美子，衣生活教育内容に対する成人の意識，日本家庭科教育学会誌，Vol. 30，No. 1，p. 31（1987年）

⑨内野紀子ほか：小学校における家庭科学習技能の開発と指導方法の改善（第１報）－「被服」領域の調査を通して－，日本家庭科教育学会誌，Vol. 33，No. 3，p. 9（1990年）

⑩中屋紀子ほか：家庭科における衣生活の教育，家庭科教育，Vol. 67，No. 14（1993年）

⑪日本教育大学協会全国家庭科部門小・中・高のカリキュラムに関する特別委員会編：一貫性を考慮した家庭科カリキュラム～基本的概念と目標観点による基本カリキュラムの作成と活用～（1997年）

英文題目および要旨

On the Curriculum of the Field of Clothing Life in Home Making Education in Accordance with the Level of Difficulty
-Study on clothing materials and clothing care-

Noriko FUKUDA

The aim of this study is to investigate a consistent and a systematic teaching contents on clothing life in Home making education. The learning contents in the field of clothing life were classified the ways of wearing clothes, buying clothes, and caring clothes. Each learning content was classified into six levels through elementary, lower secondary and upper secondary schools in accordance with the level of difficulty and importance. The basis of knowledge and skill for clothing life must be taught until the first grade and the development of those must be taught upper than the second grade in lower secondary school.